

令和7年度あしたのまち・くらしづくり活動賞 主催者賞受賞

デザインで蘇る杉の価値と、 環境改善で持続可能な里山へ

徳島県神山町 神山しづくプロジェクト

はじめに

神山しづくプロジェクトは、徳島県神山町に広がる放置人工林に新たな価値を見出し、山と暮らしの関係を再構築することを



SHIZQの木製品は、杉特有の軽さと柔らかさが特徴的で、保温性にも優れています。年輪が重なる美しさは、伐採から製材乾燥、職人の手加工により2年以上の歳月をかけて生み出されます



杉の香気成分を活用したアロマシリーズ。木部は安眠作用があり、枝葉は覚醒作用のある成分を抽出したエッセンシャルオイルや蒸留水スプレー、残渣を活用した除湿芳香剤など、地元企業と連携しエシカルな商品づくりを行なっています

目的に、2013年に発足しました。きっかけは、サテライトオフィスの開設を機に大阪から移住してきたデザイナーが、緑豊かに見えていた山の多くが実は手入れされていない人工林であり、その荒廃が水源の

枯渇を招いているという現状に衝撃を受けたことでした。

「生命の源である水を守るには、山を守らなければならない。そのためには木を使う必要がある」

この気づきから、地域資源である杉にデザインの力を掛け合わせ、山と暮らしをつなぎ直す取り組みを始めました。

杉の価値を再発見する活動

神山町では、戦後の拡大造林政策により杉の人工林が広がりましたが、林業の衰退や担い手不足により多くの山が放置され、土砂災害や河川の水量減少といった問題が顕在化していました。



「木を使えば山に光が入り、植生が回復する」という当時の考えのもと、杉の年輪や香りなどの特性に着目。食器や雑貨、エッセンシャルオイルなど多様な製品を開発。従来「扱いづらい安価な木材」とされた杉の価値をデザインの力で引き出し、国内外で高い評価を得ました。

また、地元製材所や木工職人の協力により木工所（しずくラボ）を開設。県外からの就職希望者の受け入れや、地域おこし協力隊を活用した職人育成にも着手、地域内での雇用創出や技術継承にもつながっています。

山の現状を伝える啓発活動

プロダクト開発と並行して、山林の現状や水源の危機についての啓発活動も展開。展示会や講演、SNS発信を通じて「木を使うことが山を守ることにつながる」というメッセージを発信し、徐々に理解者を増やしてきました。

こうした動きは町全体にも波及し、「神山町産材認証制度」の制定や町営住宅での木材活用が進行。直営店（しずくストア）開設や企業連携によりブランド認知も拡大し、地元でも「誇らしい存在」との声が増えています。さらに、教育機関からの依頼による授業や体験受け入れなど、次世代への学びの

場づくりも行っています。

山林の変化のなさに疑問を抱き、次のステージへ

活動の成果として共感や商品の流通は進んだ一方、山そのものは依然として変化が見えづらい状況が続いていました。「杉の価値化は進んだが、山は本当に変わっているのか？」という問いを自らに投げかけ、生物多様性や生態系の視点から学びを深めました。そして、プロジェクト10周年の節目に、地域住民100人規模のシンポジウムを開催。山と暮らしの関係を見つめ直し、未来



しずくが取り組む次世代に向けた学び（左：しずくの木工所で、地元高校生の職業体験を受け入れする様子、右：2023年に神山町で開催した、SHIZQ創立10周年記念事業「昔の暮らしと、森に想いを寄せる勉強会」には、小学生～70代まで幅広い年齢層の人々が参加した）

に向けて何ができるかを共に考える機会としました。

実践的なワークショップの開始と発展

2024年からは、生活水が減少した古民家とその周辺の耕作放棄地や裏山という典型的な里山フィールドを舞台に、「水源涵養力を育む環境改善ワークショップ（WS）」を年3回開催。近年、水不足による空き家の増加や環境悪化が進む中で、実践を通じて改善のモデルケースを目指すものです。県内外から延べ300名以上が参加し、体験型の取り組みを展開しています。

WSでは、生物多様性の専門家を招き、山林の構造や多面的な生態機能を学んだ上で、有機資材による整備や植樹・植生回復などを行っています。地元有機生産者によるゼロウェイストの食事交流も実施し、地域理解と参加者同士のつながりを深めています。

水・空気・動植物や人も循環する「めぐる谷」と名付けたフィールドは参加者にとって大切なコモンフィールドとなり、継続的なワークショップへの参加だけでなく、家族や友人と再訪する参加者も多く、関係人口の創出、また宿泊や飲食を通じて地域経済への貢献にもつながっています。

成果と変化

活動により具体的な変化が見え始めました。「しがら組み」や「ボサ置き」といった伝



WSでの作業風景。裏山の照葉樹林内の乾いた斜面に杭を打ち、落ち葉や枝を使ってしがらやボサを作ること、斜面をすばやく流れ落ちる水を留めて、ゆっくりと地面に浸透させていくことを狙います



環境改善ワークショップを開催しているフィールドの現状解説図。水が減ってしまった大地に、本来の水と空気の流れを取り戻すため、重機など使わず、人の手と身近な自然物で取り組める環境改善を行っています



2025年6月開催の第4回WSにて参加者たちと。徳島県だけでなく、東京や岡山など全国各地から参加者が集まりました

統的な手入れにより水が地表にとどまり、菌類の繁殖や発芽が促進。昆虫や小動物の生息環境が回復し、鳥や哺乳類の動きも活発化。小さな変化ですが、確かな循環の兆しを感じています。

特に象徴的なのは、初回のWSでは2日間の使用で枯渇した井戸水が、1年後の第4回終了時には余剰が出るほどに回復したこと。目に見えるかたちで山の保水力がよみがえりつつあります。

参加者からも、「山と海のつながりを実感し、地元でも取り組みたい」「人間も生態系

の一部だという学びを教育現場で伝えたい」といった声が寄せられています。こうした意識の変化も成果と捉え、行動につながるサポートも行っています。

今後の展望

今後はWSの定期開催と人材育成を軸に、より多くの人が継続して森に関われる体制を整えます。教育機関と連携した次世代プログラム、企業のCSR連携、さらには寄付や購入による支援も受け入れられる仕組みを整備予定です。

また、海外展開や他事業者との協働強化を進め、「使う・育てる・つながる」が循環する持続可能な地域モデルを構築していきます。

おわりに

神山しずくプロジェクトは、杉の価値化を起点に、多様な人々が山に入り手を動かす取り組みへと発展してきました。自然環境の再生と地域社会の活性化を同時に実現する実践例として、これからのまち・くらしづくりの一助となれば幸いです。

(神山しずくプロジェクト)

副代表 渡邊朋美)